

編集後記

◇強ものたちの祭典「かいじ国体」も終り、うたげのあとに秋は深まっていきました。市史研究第三号をお届けします。

本号には、七編の論考、史料・調査報告二編、他に「市史の広場」に小品二編をそれぞれお寄せいただき、一座談会を収録しました。

◇巻頭の竹山委員の論文は、政党政治家大養毅の書簡七通を新たに世に出すものであって、明治後半、改革派・非改革派で揺れ動く中央政局、またそれに連動する県内の政情を生々しく伝えてくれる貴重なご発表であります。

白倉委員には、山梨に縁の深い太宰治とその作品に表われる甲府をテーマにご執筆願いました。生の不安、生存の危機を製作のモチーフとしていた太宰が、甲府に住んだ前後は最も安定していた時期といわれ、彼が作品を通じて表わす甲府の様々は、本論で明らかにされる、モデルとなった町名や建物などを交差してみると興味深いものがあります。

齋藤（康）委員は前号に続き若尾財閥がテーマで、本号では主に地主経営の分析を行い、若尾家の経営基盤の主要部分が地主的土地所有にあったと推測されています。

清水氏「明治中期における甲府の学校沿革史」は投稿。「学制頒布」以後の初期近代教育体制の展開が一眸できます。

◇中沢委員「甲斐府中概観」は前号飯沼論文の批評。本誌が、地方史研究がより深化するための「場」となることは当初から期待するところであり、その意味からも甲斐府中を例に戦国城下町の都市像を試論された飯沼論文、またそれに対して「私見の開陳」とされた中沢論文は、大変意義深いものがあります。

小沢委員「甲府にみられる墓碑・墓石の変遷」は、墓碑・墓石のうつりと時代の特徴を考察された異色の論考といえます。

守屋委員は、印聖ともいわれる江戸中期の篆刻家高芙蓉に関する研究で、とりわけ謎とされる出自についての論究は注目されるものでしょう。

◇考古に関するものは二編。田代委員「一の森経塚発掘報告」は、昨冬、市史編さん委員会が行った甲府市北部上積翠寺町の遺

跡発掘調査の報告です。小雪舞う嚴冬の発掘から、出土品の整理・分析、報告書の作成まで、終始担当された田代委員の御労苦に敬意を表します。

保坂・河西両氏は、相川扇状地から発見されたナウマン象臼歯化石の報告に加え、先土器時代研究の展望をも考究された貴重な発表で、投稿いただいたものです。

◇座談会。こうした聞き取りは、戦後史を総括的に捉えるうえで、史料の空白部分を補う面で有効でしょう。坂本委員には多々お骨折り願ひ有難うございました。

「市史の広場」には、相原、金丸のご両氏に小品をお寄せいただきました。両氏とも市史に必要な史・資料の調査活動では、日頃御協力を願っておりこの機会にお礼申し上げる次第です。

◇市史本編の編集は、職員委員長はじめ市史発刊の先陣を切る近世部会各委員方の献身的な御努力により、着々と進んでおります。現在、近世史料編（町方）全三巻が再校の段階にありますので、年内、遅くとも新年早々には配布できる予定です。

どうか御期待いただき度く存じます。

（高木）